障がいは一つの個性

私は、今年の夏休みまで街で障がいのある人に出会うと、どうしていいのかわからなくなることがありました。

夏休みに、近くの商店街で車椅子に乗った人たちがどうを配り、呼びかけをしている姿を目にした時のことです。そこで、一枚の紙を受け取り『ステップ』という自立応援センターがあることを知りました。障がいのある人は外出したくても、一人ではどうすることもできません。そこで、介助者がお手伝いをして、自立を助けるというものなです。

私は、『ステップ』の会員である鈴木さんからお話を聞く機会がありました。鈴木さんは、障がいのある人で、講演などを通じ障がい者への理解を求めて活発に活動されています。しかし、県内では、まだまだ鈴木さんのような人たちは少ないのだそうです。外出したいのにできない、自分の生活を改善したいと思っても、意見が受け入れられないことなどかなりきびしい現実があるのです。それに対して、都会では、障がいのある人に対する理解が広がり、街で障がいのある人、車椅子に乗っている人を見かけるのはごくあたりまえのことだそうです。そして、あらゆる面で活発に活動される人が多いのです。

私は、障がい者に対しての人々の考えや理解が、遅れているということをはじめて知りました。今までは、考えもしなかったことなので大変驚きました。障がいのある人をあまり見かけないのは、単に障がい者の方が少ないせいではなかったのです。障がい者に対する意識の遅れが、その人たちを消極的にさせているのです。障がいがあると、日々の生活のどんな点に不自由を感じるのか、どんな面で困るのかはなかなか理解できません。その人にしか分からないことです。障がいのある人の意見が無視されてしまっては、いつまでたっても前進できません。

また、鈴木さんは、話の中で、

「障がいというのは、眼鏡をかけているのと同じようなもの。目が不自

由だから眼鏡をかける。体が動かないから車椅子に乗る。それは、君たちと何ら変わりはしないのです。障がいは一つの個性なんですよ。」と教えて下さいました。鈴木さんと話していて、私は自然な気持ちで障がいのある鈴木さんと話している自分に気がつきました。今までは、どのように接してよいのか分からないと思っていたのに、何の抵抗もありませんでした。障がいのある人を特別な存在として見てしまうのは、障がいのある人たちと接する機会が少なかったからだと思います。もっと盛んに交流できるようになれば、身近な存在として見たり考えたりできると思います。しかし、今のままでは障がいのある人たちが、街に出たくても出られません。そのために『ステップ』が活動しているのです。

障がい者差別について鈴木さんは、

「街に出かけた時、バスに乗れなかったり、みんなが当たり前にできることができないという状態が差別だ。」

と言っておられました。今まで私は、障がい者に対する差別は、気持ちの問題だけだと思っていたので、これを聞いて驚きました。私が、毎日何気なくしていることが、障がいのある人にとってはできない場合があります。しかし、介助の体制ができていれば、いくらかは改善されるはずです。施設や設備をととのえ、障がいのある人が生活しやすい環境をつくっていくためには、私達の意識を変えることだと思います。

そうなると、近い将来、障がいのある人が当たり前に暮らせ、安心して活動できる社会が実現できると思います。そのために私ができることは、ボランティアに参加したり、積極的に交流したりするという小さなことだけかもしれませんが、まず、最初の一歩を歩みだすことだと思います。